

平成21年度障害者保健福祉推進事業

**障害のある人の芸術文化活動を主体とした地域コミュニティの形成研究事業**

障害のある人の芸術文化活動を主体とした地域コミュニティの形成研究事業

目次

|  |             |
|--|-------------|
| <b>I 事業概略</b> . . . . .                          | <b>p. 3</b> |
| 1・目的   |             |
| 2・事業の概要  |             |
| 3・事業内容   |             |
| 4・事業の効果及び活用方法                                    |             |
| 5・全体のスケジュール                                      |             |
| <b>II 事業内容</b> . . . . .                         | <b>p. 8</b> |
| <b>A・障害のある人を機軸としたコミュニティアートセンター「たけし文化センター」の実験</b> |             |
| 1・たけし文化センターの概要                                   |             |
| ① 設立の経緯  |             |
| ② 趣旨   |             |
| ③ 実施内容・スケジュール                                    |             |
| <b>2・たけぶんハッシン！実施事業</b>                           |             |
| ① ぞくぞく～生活とある表現展～                                 |             |
| ② 美術部  |             |
| ③ 美術部展   |             |
| ④ めくるめく紙芝居 in たけぶん                               |             |
| ⑤ たけし紙づくり  |             |
| ⑥ ブンブンスケッチ in 浜松オート                              |             |
| ⑦ 音楽の日   |             |
| ⑧ 写真展「へやのあるじ」                                    |             |
| <b>3・たけし文化センターの成果</b>                            |             |
| ① 障害のある人を機軸としたコミュニティアートセンター「たけし文化センター」           |             |
| ② 障害のある人のかかわりから見てきた就労の形                          |             |
| ③ 自己の回復～居場所としてのたけし文化センター～                        |             |
| ④ 福祉施設の社会資源化としてのたけし文化センター                        |             |
| <b>B・障害のある人の新しい働き方生き方の可能性研究</b>                  |             |
| 1・検討委員会の構成                                       |             |
| <b>2・「障害のある人の新しい生き方研究会」概要</b>                    |             |
| ① 開催概要   |             |
| ② 総括   |             |
| <b>3・ヒアリング</b>                                   |             |

- ① 広島市現代美術館
- ② アートセンターきらり

**4・第9回全国障害者芸術文化祭しずおか大会 全国公募展「ぞくぞくゾクゾク」**

- ① 開催の経緯
- ② コンセプト
- ③ 今大会のねらい
- ④ 展示企画内容

**5・福祉サービス事業「アルスノヴァ」**

- ① アルスノヴァの背景
- ② アルスノヴァの利用者のタイプ
- ③ アルスノヴァのたけし文化センター

**III 提言** . . . . . p. 28

**1・障害のある人のシゴトのあり方**

**2・障害のある人の地域との関わり方～地域コミュニティの中核としてのあり方～**

たけし文化センター構想[中心市街地編]

たけし文化センター構想[福祉施設編]

**IV 添付資料**

**1・メディア**

- 朝日新聞 2009年12月29日
- びぶれ浜松 2010年3月4日
- 中日新聞 2010年2月27日
- 静岡新聞 2010年1月24日
- 中日新聞 2010年1月24日
- 静岡新聞 2010年3月11日

**2・広報資料**

- たけし文化センターBUNSENDOPANフレット
- ぞくぞく～生活とある表現展～DM
- 障害のある人の新しい生き方研究会フライヤー
- 美術部展フライヤー
- NPO法人クリエイティブサポートレッツ会報誌 vol. 31
- NPO法人クリエイティブサポートレッツ会報誌 vol. 30
- NPO法人クリエイティブサポートレッツ会報誌 vol. 29
- NPO法人クリエイティブサポートレッツ会報誌 vol. 28
- 第9回全国障害者芸術・文化祭しずおか大会パンフレット

## 平成 21 年度障害者保健福祉推進事業

### 障害のある人の芸術文化活動を主体とした地域コミュニティの形成研究事業

## I・事業概略

### 1・目的

障害のある人の自立と社会参加をさらに促進するために、障害のある人個人を基軸にしたコミュニティーアートセンター(たけし文化センター)を浜松市中心市街地に実験的に創設し、障害のある人の熱意や視線を軸としたアートセンターの可能性を調査する。同時に、障害のある人の福祉施設が地域のコミュニティをアートでつないでいくセンターとして成り得るのかを、この実験と研究会を通して検証し、コミュニティをつなぐ担い手としての障害のある人の就労のあり方を研究する。

### 2・事業の概要

昨年度の事業を通して、全国では、先進施設を中心に障害のある人の文化芸術活動が盛んに行われているが、まだまだ、市場を開拓するどころか、障害者の社会的な地位や捉え方を変える動きまでにはいたっていないことが解った。また、当法人の今までの活動を通して、障害のある人の文化芸術活動には、地域のコミュニティの中核となり得ることを実感してきた。そこで、本事業では、障害のある人の文化芸術活動を通して、さまざまな市民をつなげ、集まる、地域のコミュニティ文化センター(アートセンター)を実験的に設立し、福祉の枠組みの中だけで完結するのではない、新しい、障害のある人の施設のあり方を検討するとともに、障害のある人の市民の捉え方を、文化芸術活動によって変えていきたい。

### 3・事業内容

#### ①浜松市中心市街地に障害のある人を基軸としたコミュニティーアートセンター(たけし文化センター)設立実験

- ・ 開催期間:21年10月24日～22年3月22日(営業日数106日、 来場者数1817人)
- ・ 展覧会の実施「ぞくぞく～生活とある表現展」(13日間、6名出展)「美術部展」(7日間、16名出展)、写真展「へやのあるじ」(20日間)
- ・ ワークショップの実施(めくるめく紙芝居、美術部、たけし紙つくり、音楽の日) 計47日実施
- ・ 講座の実施(3講座、38日実施)
- ・ 人材育成セミナーの実施(8回)
- ・ その他、市民による持ち込み企画(総企画数24)

#### ②地域コミュニティの中核を担う障害のある人の新しい就労、生き方研究

- ・ 検討委員会の発足
- ・ 障害のある人の新しい生き方研究会の実施(11月～3月、5回)(内、公開研究会4回)、参加総数102名
- ・ ヒアリング(広島市現代美術館、アートセンターキラリ)
- ・ 第9回全国障害者芸術・文化祭しずおか大会企画展示
- ・ 福祉サービス事業アルスノヴァモデル研究

#### ③報告書の作成

### 4・事業の効果及び活用方法

- ・ 障害のある人を基軸とした「たけし文化センター」が、コミュニティをアートでつなぐセンターとなることが実証ができた
- ・ 浜松市の市民、行政にこうしたコンセプト及び事業を周知することができた
- ・ 引き続き、障害のある人が基軸となるコミュニティーアートセンター(たけし文化センター)の必要性を訴えていく実績とネットワークができた(鴨江別館のアートセンター化)
- ・ 障害のある人の視線を基準とすることによって新しい公共の姿が見えてきた

- ・ 地域のコミュニティをつなぐ障害のある人の働き方を実験することができた
- ・ 地域のコミュニティを支える障害のある人の施設の有り方を提示することができた
- ・ 障害のある人の新しい生き方、就労のあり方を示すことができた
- ・ この実験を元に、平成22年4月から、障害者福祉施設アルスノヴァ及びたけし文化センターとして、継続して実践する

アルスノヴァで障害のある人の新しい就労の形、地域のコミュニティーをアートで支える福祉施設のあり方を引き続き実験していくことができる

## 5・全体のスケジュール

| 日時      | 内容   | たけし文化センターイベント  |
|---------|--|--|
| 2009年6月 | 申請書の確認<br>スケジュール等の作成   |  |
| 7月      |  |  |
| 8月      | たけぶんハッシン！<br>サマーアートキャンプ2009「学校マイホーム」<br>14日～16日                      |  |
| 9月      |  |  |
| 10月     | たけし文化センターBUNSENDOSTART   | ぞくぞく ～生活とある表現展～  |
| 11月     | 第9回全国障害者芸術・文化祭しずおか大会<br>13日～15日<br>第1回障害のある人の生き方研究会(11月13日)          |  |
| 12月     | 第2回障害のある人の生き方研究会(25日)  |  |
| 2010年1月 | 第3回障害のある人の生き方研究会(29日)  | ●美術部(毎週末)<br>17日●たけし紙づくり<br>30～31日●めくるめく紙芝居ワーク<br>ショップ             |
| 2月      | 第4回障害のある人の生き方研究会(17日)  | ●美術部(毎週末)<br>21日●たけし紙づくり<br>28日■音楽の日<br>27～28日●めくるめく紙芝居ワーク<br>ショップ |
| 3月      | アルスノヴァスタート(3月～)<br>いいところ発見1人材育成セミナー発表会(14日)<br>第5回障害のある人の生き方研究会(22日) | ●美術部(毎週末)<br>20～21日●めくるめく紙芝居ワーク<br>ショップ                            |
| 4月      | 浜松市入野町にて<br>福祉サービス事業(自立訓練、児童デイサービス)、たけし文化センタースタート                    |  |

## A・障害のある人を基軸としたコミュニティアートセンター「たけし文化センター」の実験

### 1・たけし文化センターの概要

#### ①設立の経緯

NPO 法人クリエイティブサポートレッツは、主に障害のある人たちの表現活動への支援を通して、様々な人たちが「ちがいを認め合える多様性のある社会を目指し、2000年から活動を続けてきた。

2007年度に浜松市との共催で行った「浜松アートフォーラム 2008」を契機に、生活圏の違う人たちが出会い、つながる場の必要性を訴えてきた。2008年度には、静岡文化芸術大学にて開催した障害のある人たちの展覧会「Rolling collection vol.1」のサテライト会場として、法人の理念を具体化した場「たけし文化センター」を2週間、期間限定オープンした。

#### ②趣旨

文化的魅力を備えた街の集客力やそこから波及する経済効果の発端として、地域資源・地域文化集積発信機能に特化した文化施設の設立を行う。

分野の垣根を越えて人をつなげる力のあるアートを主軸とし、主に無形の地域資源(人や活動)を、異分野との交流やコラボレーションやネットワーク構築を通して、外部へのアピールが充分にできる形で発信してゆく。また、その効果として地域資源の持つ可能性の拡大を視野に含む。

ジャンル等、枠にとらわれないことのない障害のある個人の視点を、そのあり方を伝えることから発信し、日常的な事物の捉え方の読み替えによる気付きの発見やその楽しみを生み出し、想像力や応用力を育む土壌の形成を促したい。

障害のある個人のあり方を手本とし、価値を画一化しない、多様性のある場作りとイベントを主体に運営し、多様性を大事にし、さまざまな地域文化を包括できる文化センターを設立する。人の本来有する人とつながる力を、文化を通して最大限に活かすことが最も重要なポイントであり、この施設の存在意義である。

イベント等の開催時、非開催時の区別なく人の流れを生む仕組みに、商店会・地域住民を始めとする街づくりを進める他団体との連携をとり、人とのつながりを重視して取り組んでゆく。

創造都市にふさわしい、浜松にある幅広いジャンルの地域資源(ものづくり、風土、人など)をベースとした文化の集積・発信を通して、全国的にもアピール力の強い文化センターを作っていく。

#### たけしとは？

館の冠にもなっている「たけし」とは、当法人の代表、久保田翠の長男であり、重度の知的障害をもち、現在特別支援学校中等部2年生の「久保田壮」のことである。彼の「やりたいことをやりきる熱意」を館の方向性として運営をすることで、障害のあるなしに関わらず、既存の枠組みを越えて人と人がつながるきっかけとしている。

### ③実施内容・スケジュール

会期 2009年10月24日(土)～2010年3月22日(月)  
(2009年11月7日～11月22日の間一時休館)

営業時間 11:00～20:00(延長あり)

休館日 月曜日(祝日は開館)

場所 浜松市中区連尺町314-1 旧文泉堂書店

主催 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ  
たけし文化センター  
浜松市

協賛 財団法人文化・芸術による福武地域振興財団  
厚生労働省「平成21年度障害者自立支援調査研究プロジェクト」  
フィリップモリス株式会社  
日本たばこ産業株式会社

協力 ゆりの木通り商店街、株式会社高忠商会、NPO 法人魅惑的倶楽部



たけし

### ●スケジュール

3月 フィリップモリスジャパン助成決定  
7月 浜松市文化芸術創造支援事依託  
8月 事業計画書提出  
9月 詳細決定  
10月 設営 開館  
11月 一時閉館  
12月 通常営業  
1月 通常営業  
2月 通常営業  
3月 閉館



たけし文化センター-BUNSENDOの様子

### ●来場者数

10月 131人 開館日数7日  
11月 378人 開館日数12日  
12月 250人 開館日数22日  
1月 474人 開館日数22日  
2月 434人 開館日数24日  
3月 387人 開館日数19日  
合計 1817人 営業日数106日



たけし文化センター-BUNSENDOの様子

### ●運営スタッフ

久保田翠 鈴木一郎太 深澤孝史 夏目はるな 坪井勲 小栗和敏 平山友美

### ●運営サポーター

村松弘美 笹田夕美子 石川智 戸田光聡 横村あい 宇田季美子 村松直美 齊藤恵理華

## ■業務内容■

### ●オープンスペース

だれでも入れ自由に使えるスペース。基本1階フロアは全てオープンスペースとして開いている。くつろいだり、遊んだり、サロンとして使用できる。また、そこで起こることや出会う人から偶発的な小企画につなげる。

### ●たけぶんハッシン！事業

主催プログラム。イベントの企画立案、実施業務をおこなう。

### ●貸しスペース

オープンスペースを利用した貸しスペースを運営。イベント会場、展示、物販ブース、制作、作業等幅広く活用できる。

### ●カフェ

営利目的ではなく、人が交流する仕組みとしてのカフェを運営。だれでも無理なくに頼めるように値段は参考価格のみでドリンクを販売。

### ●文化相談

さまざまな問題を文化的な枠組みで捉える相談窓口を開設する。個人的な問題から街の文化政策まで幅広く受け付ける。



## 2. たけぶんハッシン！実施事業

### ①「ぞくぞく ～生活とある表現～」展

#### 概要

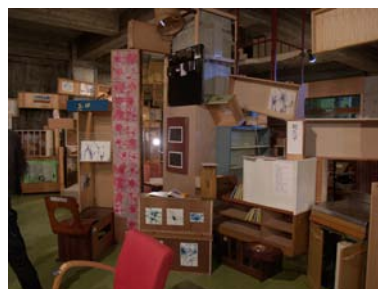
アーティスト、障害者など立場を分けずに、それぞれの日常に密接に関わる表現の展覧会を開催。

#### 趣旨

日々、私達はそれぞれの価値観を大切にしながら生活している。かなりの熱意を込めている場合もあるが、それはあくまで個人的なため、人には何かわからないこともよくある。そもそも人に伝えることを目的としていなかったりもする。

しかし、それらは個人的であるが故にその人の生活の一部となっていたり、もともと生活の中にあたりして、毎日のように生み出され、何年も継続されていることがしばしばある。そうした行為や活動やそこから生まれるものは、受け手次第などところがあり、人からの視線により「わからないこと」が、熱意を持った「表現」に変化させられる。

本展は、そういった生活と表現が強く結びついている人達の作品やノート、メモ書き、失敗や切れ端、ちょっとしたもの、行動などを集め、生活の色濃く表す象徴として家具を壁や台として展示した。



「ぞくぞく 生活とある表現」展示風景

**会期** 2009年10月24日(土)～11月6日(金)

#### 出品者

池谷和樹、乾久子、なるや、益田典邦、安岡真理、山内真

～出品者紹介～

#### 池谷和樹

浜松特別支援学校中等部1年生。いろいろな場所でなにかしらの遊びを見つけて楽しむことがとても得意。今回は筆記体のように書かれた文字群と、外遊びの一場面を展示。

#### 乾久子

美術家。線をテーマに作品制作を続けている。今回は日々のドローイングとこれまで門外不出だった作品以前の未整理な日々の生活での想いなどが綴られた10年分のノートを展示。

#### なるや

浜松特別支援学校中等部2年生。絵をよく描く。描かされても描かないけど、描く。今回はこれまで描いてきた何千枚のドローイングの中から選びとって一面に展示。

#### 益田典邦

浜松市発達医療センターかがやき利用者。毎日書き続ける日記や、失礼な言葉の数々と片思いの相手への気持ちなどが入り交じったものをよく緑色でかく。

#### 安岡真理

美術家、絵本作家。日々ドローイングや絵本を制作。今回の展示では絵画作品と小さなオブジェ、絵本制作のときに失敗した図版をつかったインスタレーションを展示。

#### 山内真

浜北特別支援学校中等部2年。大量のトラックの絵を描いたり、色見本の用に丸く色を画面に置いていたり、日々の生活で気になったものを描いたり、失敗したりする。

**来場者数** 237人

## ②美術部

### 概要

たけし文化センターBUNSEND0(たけぶん)にて毎週金土日に活動する美術部を開設。つくりたいものがある人はだれでも入部でき、美術部部長に紙工作を表現手段とするアーティスト、高杉悦生を起用し彼の紙工作技術取得を基礎練習に据えて、それぞれがつくりたいものをつくり最終的にそれらを発表する展覧会を目標にした。

### 趣旨

たけし文化センターという、それぞれの個人の特性を活かす場、自然と活動できるひとつのしくみとして企画。単なる創作活動の場ではなく、人と人が対話を通してそれぞれのおもしろさを引き出しながら、認め合える関係性を築き、そうした土台の上で生まれる表現を模索していく。

**開催期間** 2010年1月15日(金)～3月21日(日) 毎週金土日

### 活動時間

金曜日 15:00～18:00

土曜日 13:00～16:00

日曜日 13:00～16:00

### 部員構成(参加者)

部長 高杉悦生、顧問 深澤孝史、部員数 14名

### 内容

基礎練習(平面基礎、紙工作基礎)

作品制作



美術部の様子

## ③美術部展

### 概要

さまざまな目的で集まるたけし文化センターの美術部員達の日々の活動の成果を作品として3階スペースにおいて展示した。

### 趣旨

美術部の活動が部員個人の内的な目的に収まるのではなく、彼らの表現活動が開かれたものになるように企画した。また、部長や顧問はもとより、部員たちがそれぞれの関わりの中から必然的に生まれる表現を展示発表することで、目的と技術が一致した作品展示を目指し、適切な価値観の提示を目指した。

**日程** 3月16日(火)～22日(月)

**時間** 11:00～暗くなるまで

**出品者** 16名



「美術部展」展示風景

#### ④めくるめく紙芝居 in たけぶん

##### 概要

5回の連続したワークショップの中で絵を描き、ストーリーをつくり、音楽をつくり、最後に発表をするという紙芝居づくりのワークショップ。その場で偶発的に出てきたものを可能な限りすべて盛り込みまとめあげる。

##### 紙芝居ワークショップ「めくるめく紙芝居プロジェクト」とは？

—やる気のないひとにも居場所がありやる気満々のひとが潰されずそのどちらでもないひとにも無視されない場とそこから生まれるパフォーマンス作品—

紙芝居を機軸とした数回にわたる場作りのワークショップを通して、参加者各々の能力を活かした発表へとまとめあげてゆくプロジェクト。参加者はどんな人であれ、水平な立場で活動し、制作、発表だけの参加ではなく、マネジメントや裏方まで、それぞれのできるところ、興味のあるところに役割を見出していく。最終発表形体は、参加者の変化により、紙媒体に限らず、音楽、パフォーマンスなども含まれる。

ワークショップでは絵と楽器のある空間を用意し、各々が好きにすごしてゆく中から生まれてくるものを、「妄想会」という名のミーティングでまとめあげて物語にしてゆくという企画会議も含まれる等、紙芝居作品の制作はもちろん、その発表に関わる事柄全体を包括した内容になる。

##### 趣旨

個々のやりたいことをやりきる場として開いているたけし文化センターBUNSENDO。やりたいことをそれぞれがやることを、ひとつの枠組みの中にまとめるとどうなっていくのか具体化される一例として企画。

##### 日時

1月30日(土) 13:00～16:00 ワークショップ  
1月31日(日) 13:00～16:00 ワークショップ  
2月27日(土) 13:00～16:00 ワークショップ  
2月28日(日) 13:00～16:00 ワークショップ  
3月20日(土) 13:00～16:00 リハーサル  
3月21日(日) 13:00～16:00 公演

##### 参加者

1/30 13名  
1/31 5名  
2/27 6名  
2/28 14名  
3/20 12名  
3/21 22名



「めくるめく紙芝居」公演の様子

##### 評価と反省

- ワークショップ非開催時もたけぶんの来館者を巻き込んで、紙芝居の制作はおこなわれ、場の特性を活かし関わり口が多かった。
- 参加者の中に春におこなわれる「路上演劇祭」の関係者がいて、今回の作品はそこで再演されることになった。
- たまたま場に居合わせた人も参加でき、発表の際の演奏には誰でもが加わられた。
- 参加者に大人が多かったからか、ストーリーに使われる言葉が難しかったため、楽しめる人に制限があった。
- 「誰でも参加できる」といった場合には、広報の仕方と受け入れ体制にかなりの気配りが必要なことがわかった。

## ⑤たけし紙つくり

### 概要

集合時間も帰る時間も参加者まかせな、1日中行うかみすきワークショップ。  
たけし文化センターに名前を聞かれている「たけし」が紙をやぶることが好きなことから、その破った紙を活用するという趣向で企画されたプログラム。

### 趣旨

たけしの一般の人より特化した行動を企画の軸に据え、障害のある人の个性的だが個人的な表現活動をいかに社会化していくかという実験をプログラムに組みこむことでおこない、場づくりを実践した。

### 日時

第1回 12月13日(日) 10:30~16:00

第2回 1月17日(日) 10:30~16:00

第3回 2月21日(日) 10:30~16:00

参加者 第1回 18名 第2回 14名 第3回 5名

### 評価と反省

- 会場の自由度の高さとサポートスタッフが多かったことがあまり、紙すきにのれない子どもたちがあみ出すさまざまな遊びを享受でき、取り残される参加者がでなかった。
- 母は紙すき、子どもはおもちゃの車を乗り回している、といった個々の参加者が思い思いにすごすことができた。
- 工程がはっきりしていたため、サポートのスタッフがそれぞれ役割を分担しやすかった。
- 既知の参加者が主で丁寧な内容の広報が必要。
- 出来上がった紙の利用が十分ではなかった。



「たけし紙つくり」の様子

## ⑥ブンブンスケッチ in 浜松オート

### 概要

NPO 法人魅惑的倶楽部と協同で障害のある子どもの表現のサポートをおこなってきたレッツと、オートレース場の活性化を長年おこなってきた長田治義氏が副理事を務める魅惑的倶楽部の協同企画として、浜松オートレース場にてレース見学をしながら、参加者がそれぞれ気になったものをスケッチするイベントを開催した。

### 趣旨

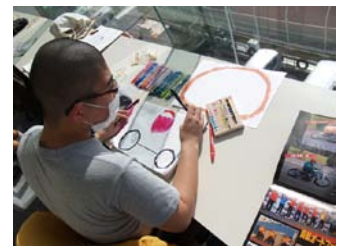
絵が好きな子どもたちが集まって自由に絵を描く機会を、未だ偏見の多い浜松オートレース場にてつくることで、レース場をより開かれた場所にして様々な人に知ってもらい、障害のある子どもたちの描いた絵をオートレースの関連グッズなどに使用することで、障害のある方たちの自然のありようが就労に結びつきかけづくりになることを目的とした。

日時 1月23日(土) 10:00~14:00

参加者数 11名

### 評価と反省

オートレース場では選手会の方々が快く対応してくださり、イベント自体もスムーズに進行することができ、作品もたくさん生まれた。こうした活動を継続していくことが今後の課題になっていくであろう。また障害があるがゆえに特化した彼らからそのまま発露される特性が、こうした企画を積み上げることで自然と社会に仕事として認識されることもねらいの1つとして企画しながらも、そうした状況がすでに実現していると想定しているたけし文化センターとしては、健常の参加者も一緒になってイベントを行うので、どうしても趣旨が多重化し、わかりにくくなってしまった。たけし文化センターの外でたけし文化センター的活動を協働で行うことの必要性和難しさを感じた。



## ⑦音楽の日

### 概要

朝から夜まで一日中続く音楽会。

### 趣旨

年代やジャンルを越え音楽を楽しみ、また障害のある人が主導となる即興的なコラボレーションをはさむことで、会話以外のコミュニケーションを促す。

日時 2月28日(日) 11:00~21:30

### 参加グループ

#### ドリームフィールド

フリースクールに通う子どもたちがメンバー。メンバーを入れ替え、数種類のバンドが混在。

#### ひぐらし

静岡県西部を中心に活動するフォークバンド

#### タカタカ

神奈川県平塚市にある障害者福祉施設 studio COOCA のメンバーで構成されるバンド。

#### ルミカ

12月2日にデビューしたソロシンガー。全国のフリースクール74箇所をまわりライブを行うプロジェクトを行っている。

#### すててこ

島田市在住の二人組ユニット。

#### THUNDERBEAT

元 THE BLUE HEARTS のドラム、梶原徹也氏のソロユニット。ドリームフィールドのメンバーとの競演も。

#### 宏俊と魔法のなかま

浜松を中心に活動をするソロの弾き語りシンガー。

#### かわいもも

静岡県西部を中心に活動する BLASS DROP の中の二人がこの日だけ二人でユニットを組んだ。

#### Anna Sugars

静岡県西部を中心に活動する3人組のインストバンド。

#### たかだはせがわ

音楽活動もするヘルパー二人組。ヘルパーとしてたけしとは関わっている。

#### G2

静岡県西部を中心に活動する二人組ユニット。



「音楽の日」の様子

### 評価と反省

- タカタカの演奏で前面に出ている「楽しんでやる」というエネルギーが、他の演奏者に伝わり、障害のある人の持つ力が音楽を通して伝わった。
- 「自ら演奏する」、「人の演奏を聴く」にプラスして一緒に創るという部分をプラスしたかったが、即興でのコラボレーションはみんなができるものではなく、ハードルが高いという話が参加バンドからきかれた。
- 即興要素をより濃くした参加し創り上げる音楽会として発展させたい。

## ⑧写真展「へやのあるじ」

### 概要

障害のある人の部屋をカメラマンとともに取材し撮影した写真展。

### 趣旨

障害のある人の個人スペースに色濃くあらわれるその人の興味が見られる写真展を開催する。そこから、彼ら彼女らのあり方や、その周りを囲む家族や施設職員のあり方を見る。

日時 3月2日(火)～3月22日(月)

### 出品者

カメラマン 王丹弋(オウタンカ)

企画 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ

### 評価と反省

- 普段、必ずしも肯定的にはとらえられていない障害のある人たちの「こだわり」の表れである部屋を写真作品として展示することで、「こだわり」の捉え直しを示唆できた。
- 障害のある人自身のおもしろさがあるために可能な部屋のあり方であり、人そのもののよさを伝えるために企画したが、人の表れが直接的でない分、一般の鑑賞者には受け入れやすさがあつた。
- ひとつひとつの写真にその人にまつわるエピソードやストーリーがあり、それを知ることがより写真を楽しむ要素になるため、キャプションでそこを丁寧に伝える必要があつた。
- 今後取材を重ね、継続した企画としたい。



写真展「へやのあるじ」展示風景

### 3・たけし文化センターの成果

#### ①障害のある人を基軸としたコミュニティアートセンター「たけし文化センター」

公共施設は、「誰でも来て良い」といいながら、「騒いではいけない、汚してはいけない、人に迷惑をかけてはいけない」といった暗黙のルールによって、障害の人や、子ども、特徴のある人たちのバリアになっている。その中で、重度の知的障害のあるくぼたたけしを基軸とし展開したたけし文化センターは、「たけし基準」であるがゆえに、「汚しても良い、騒いでもいい、人に迷惑をかけても仕方ない」といった、ここでしかありえないルールが成立する。

6ヶ月の実験の中で、主催イベントの他に、市民からさまざまな企画が持ち込まれたが、それは90坪のスペースで同時多発的に起こり、会議をしている横で子どもが遊び、騒ぎ・・・といった状況が展開されていた。しかしそれは、思った以上に無法地帯化することがなく、ある程度の「住み分け」が行なわれ、お互いがお互いのやりたいことを尊重する雰囲気があった。つまり、ルールの敷居を低くすることで、かえって多様な活動呼び込み、そこを利用する人たちが、それぞれで工夫し、それぞれの自由さを失わない程度のルールを自分たちで作り出す場となった。さらに、横でやっている活動や行為、事象にいい意味で影響を受け、お互いを認め合うことによって、こうやってみたい、こうなれば面白いといった「創造力」に溢れる前向きに発展する場を作り出すことができたのも、大きな成果である。

この成功はやはり、障害のある「たけし」を基軸に据えたことによって生まれる「自由度」と、それを支えるアートディレクターの存在が大きい。

鈴木一郎太、深澤孝史、2名のアーティストが常駐し、さまざまな事象を調整し、つなぎ合わせていた。そのさじ加減は、2人のアーティストのセンスに支えられていたが、ここでも、NPO法人クリエイティブサポートレッツが長年行ってきた、理念「さまざまな人々がいる社会の実現」「特に知的に障害のある人や子どものそのまますべてを認めていく」といったことに照らし合わせながら、たけし基準である、何をやってもその人の熱意で評価、判断していくといった目線によって、面白い展開があった。

#### ②障害のある人のかかわりから見てきた就労の形

##### 涼太のアルバイトとは

レッツの講座に通っていて、質の高い作品を制作してきた涼太（浜松特別支援学校高等部1年）がたけし文化センターでアルバイトをすることになった。レッツが障害福祉サービス施設を立ち上げるという背景のもと、さまざまな人が文化芸術を通して交流する場で、彼らの特性を活かした就労の形、関わり方を模索し、新たなやくわりをつくるというミッションがある。涼太はレッツで続けてきた表現活動が彼の自信につながっているという側面があり、彼の活動力の支えとなっている。また彼の中に特別支援学校や、日々の生活を通して築かれてきた仕事に対するイメージがあり、将来に向けて社会のなかで求められていることを自分もやりたいという漠然とした想いがある。

今回のアルバイトプログラムは、上記の背景を踏まえながら、彼との関わり方を試行錯誤して、時に彼の仕事観をかき乱したりもしながら、彼が自然に振る舞いつつ、さまざまな人と関わりの上で能力をいかに引き出すかという実験であった。

##### 実施内容

日時：毎週日曜日 13:00～17:00

##### 活動記録

##### i. 1月17日(日)

##### 角材によるロボット制作

みるみるロボットを完成させていく涼太を見て周りの人がとても驚く。自分でも作ってみたいという声もあがり、涼太のロボット教室を開催することになる。

##### ii. 1月24日(日)

涼太のロボット教室 参加者2名



涼太の様子

- 涼太がロボットの作り方を教えてくれる講座を開く。
- 入り口スケジュール表制作  
手書きのスケジュール表を依頼して書いてもらう。
- iii. 1月31日(日)  
めくるめく紙芝居参加  
紙芝居に涼太の得意な絵を描いてもらう。
- 入り口スケジュール表制作
- iv. 2月7日(日)  
紙芝居ポスター制作  
紙芝居ロボ制作1  
涼太のロボット制作の技術を応用して、紙芝居フレームを内蔵した紙芝居ロボを制作する。まずは紙芝居のフレーム部分を制作
- v. 2月14日(日)  
紙芝居ロボ制作2  
フレームに顔手足をつけていく。
- vi. 2月21日(日)  
紙芝居ロボ制作3  
塗装作業
- vii. 3月7日(日)  
めくるめく紙芝居清書  
高さ4メートル幅5メートルの大型紙芝居作品の仕上げ作業を行う。
- viii. 3月14日(日)  
美術部展展示スペース壁面制作  
高い工作技術と現場判断力を駆使し、美術部展覧会会場に壁の仮設作業をおこなう。  
涼太作品設置  
つくった壁の前にアルバイト初日につくったロボットと、ロボットの平面作品を展示する。
- ix. 3月21日(日)  
めくるめく紙芝居参加  
紙芝居ロボ役で出演する。
- x. 3月23日(火)  
たけし文化センター-BUNSENDO 解体作業  
仮設壁や、単管で組んだ足場等を手際よく解体する。

## 課題と反省

たけし文化センターのスタッフ一名が担当となって彼の仕事のコーディネートをおこなった。彼の個人的な作品制作の場としてではなく、ましてや既存の仕事に単にあてはめるでもないこと、涼太の能力の活かし場所を見つけ、彼が関わることで、そのものの可能性が広がりを見せる、魅力的なものに変わることを彼の「仕事」と定義した。そうした新たな「仕事観」をもとに現状から具体的な関わりを導きだし、涼太にぶつけてみるという作業を繰り返した。そうした作業を丁寧にできたという点ではとても成果のある実験であったと思う。

今後の課題としては、こうした仕事観を社会の中でどう具現化していくかと考えた時、そうした仕事をコーディネートできる人材の育成、また既存の社会のしくみの中で、彼らの能力をそのまま活かした仕事を生み出すためのより広範囲なマネジメントが必要になってくるだろう。



### ③自己の回復～居場所としてのたけし文化センター

開催期間中に多くの来場者があったが、特に、アーティスト高杉悦生氏の「美術部」は、1月15日から3月22日まで、毎週末、金～日まで高杉氏が常駐し、部員(参加者)のやりたいことを中心に制作を進めて行った。今回、特別時間の制限もなく、(週末であれば来たい時に来て制作ができる)、参加費も無料で行うことで、多くの参加者があった。昼間は親子連れ、子どもの参加が多く、遠方からはるばるやってくる人もいた。日頃、子どもを連れて行きづらい子育て中のお母さんが、子どものためではなく自分のために制作をしている姿も見ることができた。夕方から夜にかけては、10代から30代の若い人が多く、週末はほぼ1日中、ここで過ごす人も多く見られた。

#### Yさんの場合

Yさんは、就職活動をしていたが、やりたい仕事を見つけれずにいた。人と接すことに興味はあったが、自分にはコミュニケーションがうまく取れないというコンプレックスがあった。美術部に参加し、他のたけぶんのメニューにも参加しているうちに、つくることが好きなことに気がついた。そして、以前からいろいろと作りためていたスクラップをたけぶんのアートディレクターでもあるアーティストの深澤氏に見せた。すごく興味を持ってもらえたことが、自信となった。自分はものづくり、人と接すること、コミュニケーションしていくことが実は好きなことをはっきりと認識できるようになっていった。たけぶんで出会った人の紹介で、4月からは、新しくできた街づくりのセンターで受付と相談を受ける職場で働くことになった。

#### K君の場合

K君は、ニートであった。音楽が好きでミュージシャンになりたいなあとってはいるが、そのために、がつがつやる気にもなれず、働くのもなんとなく億劫になっていた。美術部に参加し、いろいろな人と、話しながら進めたり、障害のある人や子どもを間近で見たり、たけしにせつかく作ったものを壊されたり、そうかと思えばギターの弾き語り大喜びされたり・・・といった時間を通して、作品展にも出品し(結構良い作品だった!)、たけぶんが終わる頃には、「働いてみようかなあ・・・」とつぶやいていた。

#### Sさんの場合

Sさんは、発達障害といわれて手帳も持っているが、福祉施設のデイサービスが大嫌いである。なんで自分は就職ができないのか、お金が稼げないのか、障害があると思われるのか・・・と常に混乱、パニックの中にいる。Sさんはむしろ行くところがないとたけぶんに来て、愚痴をいったり、パニックな状態でわめき散らしたりした。しかし、解決するわけでもなかった。でも、ここにはそれを「うんうん・・・」と聞いてくれる人たちがいる。ここにいる人たちは、彼女の話普通に耳を傾ける。説教じみたことを言う人もいれば、彼女の気持ちを汲んで、話している人もいる。深刻な話をしているにも関わらず、Sさんのストラップをたけしはいつも狙っていて、Sさんは、深刻な話をしながらもたけしに警戒しなければいけない。以前、Sさんに、「どうしてたけしはしゃべれないのか」「理解で来ているのか」と聴かれたことがある。「私の障害とはあまりにも違う」とも言っていたし、「私のほうがまだ良い」とも言っていた。「久保田さんは育てるのがいやになりませんか」とも聞かれた。「Sさん、それでもたけしも人間だし、生きているんだよ」。

Sさんの混乱はここにいたからといって収まるかどうかそれは解らない。でも、「いろんな人がいる」「世の中、話せて、どこにでもいける人ばかりじゃない」ことをSさんは知ることができた。たけしの障害を見ることで何かを感じ、そして自分と社会を意識し始めた。そして、あんなに嫌っていた施設に行く気になった。4月から、レッツが始めるアルスノヴァのメンバーになる。

#### Oさんの場合

Oさんは、大手企業の工場で技術者として働いている。40代独身。いつも何かしたいと考えている。街づくり



美術部制作風景

や、何かイベントをやってみたい…と思っていた。たけぶんオープン間もなく、たまたま前を通りかかったことがきっかけで、それからほぼ毎日たけぶんにやってくるようになる。あまりにもやりたい気持ちが強いのので、深澤氏が特別にOさんコーナーを作ることを許可した。すると毎夜、いろんなものを持ち込んで、レイアウトしていく。本人曰く「いらないけどゴミじゃないもの」。

当然、昼間に来た子供たちがそこを荒らす。飾られたCDも倒すし、もって来たライターやキーホルダーはたけしに奪われてどっかにいってしまう。それでもOさんは毎日レイアウトして帰っていく。「どうせいらないものもって来ているからいいよ」

でも実はOさん、たけぶんの人のことを意識しながら、このコーナーを作っている。ワークショップのアーティストの林さんが「アーティストはお金がなくてたいへんだ！」という話を聞きつけられ、次の日に、ダンボールで作った「募金箱」が出現し、自分の小銭をジャラジャラと入れていた。募金箱はやけに大きいと思えば、中に子供達用のお菓子も入っている。どこからか見つけてきたという、お絵かき用のエアブラシも来た子供たちが喜んで遊んでいた。たけぶんのTシャツは、レッツメンバーのかずきと深澤氏とのコラボレーションで実現した。ここがなければ出会わなかった人たちがであった。そしてOさんはすごく心地よくたけぶんを利用していた。

### たけし文化センターの居場所としての特異性

たけし文化センターはさまざまな人たちの居場所であった。社会の中で、自分にあった居場所はあるようでない。厳密に言えば、たけぶんはすべての人に開いているわけではない。社会にたけぶんを必要とする人と必要としない人がいる。今回結果的に、社会の中で居場所を見つけにくい人たちのよりどころにもなる文化センターとなったが、普段は必要としていない人がふと気がふせった瞬間に立ち寄ることもあった。そうなった大きな理由は、「たけし」という障害のある人を基軸として、ある程度のゆるさがあり、敷居が極端に低いことに起因している。

しかしそれは同時に、だらしなさととられる。そうした「だらしなさ」が嫌いな人はここには来ない。来なくても、そういう人にはきつと、居場所があるだろう。だらしない、どうしようもない、不条理で、奇異な…、たけし文化センターのこの極端な雰囲気は、実は人間の中にあるものであり、社会も同じく有するものである。それにもかかわらず、社会の中でこうした受け皿となる場所が、あまりにも少なくなってしまう。子どもから大人まで誰にとっても、あたりまえのように居場所となるということは健全な場所でもあるのだ。そして社会の「縁側」としても必要だ。それを作っていくのが、たけし文化センターの役割のひとつであることが解かった。

### ⑤福祉施設の社会資源化としてのたけし文化センター

障害のある人は最も人間らしい部分を失っていない人々である。想いがストレートで、やりたいことをやりきる。それがたけし文化センターのコンセプトになった。そうした障害のある人が多く集まる場が発するある種の雰囲気は、社会的にハンディとなる部分を抱えている人々にとって、非常に敷居が低く、居心地がよいところになりえることが実証できたように思う。

障害のある人の施設は、そこにいる障害のある人のケアをすることが施設の第一義であれば、どうしてもクローズしがちになる。しかし、彼らの社会的な有益性は、障害に関係なく、何らかの社会的なハンディがあったり、いわゆる一般の人々の居場所を作り出すことに、大きく貢献できることである。福祉施設が、そこにいる障害のある人たちのケアを担保しながら、開いていく方法を模索することは非常に重要であり、極端な言い方をすれば、そうした雰囲気を有した場は障害のある人にしか作りえないものなのかもしれない。

このように、障害のある人の福祉施設の、新しいあり方、社会資源化にもつながると今回の実験を通して確認することができた。

## B・障害のある人の新しい働き方生き方の可能性研究

### 1・検討委員会の構成

検討委員会メンバーと開催概要

|   | 氏名      | 役職                           |
|---|---------|------------------------------|
| 1 | 長田治義    | NPO法人魅惑的倶楽部副理事               |
| 2 | 片岡祐介    | 音楽家、打楽器奏者                    |
| 3 | 久保田翠    | NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長       |
| 4 | 関根幹司    | スタジオCOOCA施設長、元湘南福祉センター工房絵施設長 |
| 5 | ホシノマサハル | コミュニティーアーティスト                |
| 6 | 本後健     | 静岡県障害者支援局長                   |
| 7 | 山口祐子    | 浜松市市議会議員、元浜松NPOネットワークセンター理事長 |

### 2・「障害のある人の新しい生き方研究会」概要

#### ①開催概要

#### 第1回 障害のある人が福祉の現場で働くということの意味とは？

時間 11月14日(金)10:00～13:00

場所 グランシップ(第9回全国障害者芸術・文化祭しずおか大会開催時)

ゲスト 柴崎由美子(財団法人たんぽぽの家、エイブルアートカンパニー本部関西事務所代表)  
原田啓之(社会福祉法人JOY倶楽部プラザ主任生活支援員、アトリエブラヴォ担当)

メンバー 長田治義、久保田翠、関根幹司、本後健

障害者芸術・文化祭しずおか大会開催中の11月13日、グランシップ会議室にて、第1回障害のある人の生き方研究会を実施した。奈良のたんぽぽの家のディレクターでありエイブルアートカンパニーを立ち上げから担当している柴崎さんと、福岡の社会福祉施設でアートをシゴトとしている施設を運営している原田さん、研究委員である、関根幹司さんも平塚で17年間障害のある人のアート活動をシゴトとする施設を運営しており、現場の状況や、そこから見えてくる、障害のある人のシゴトのあり方や意義を話し合った。

#### 第2回 障害者施設は開いているのか。障害のある人のシゴト観

時間 12月25日(金)18:00～21:00 その後交流会

場所 たけし文化センター-BUNSEUDO

メンバー 長田治義、片岡祐介、久保田翠、関根幹司、ホシノマサハル、本後健、山口祐子

その他 自由参加 8名、レッツ関係者5名

第2回目は、浜松市の中心市街地でおこなった「たけし文化センター」を会場に、研究会メンバーが集まって、公開で研究会を行なった。障害のある人のシゴトの意義や、施設はどうあるべきなのかを話し合った。

#### 第3回 圧倒的に他者と違うところを長所に変えるということとは？

時間 1月29日(金)18:00～21:00 その後交流会

場所 たけし文化センター-BUNSEUDO

メンバー 長田治義、片岡祐介、久保田翠、関根幹司、ホシノマサハル、本後健、山口祐子

その他 自由参加5名、レッツ関係者6名

たけし文化センターで、公開研究会として行なった。障害のある人の圧倒的に他者と違う価値観は、問題行動とし

てとらえられ、禁止、無くすことを基本に考えられてしまうが、しかし、それを「個性」と見れば、その人の特長ともなり、これによって仕事へ派生させていく可能性もないわけではない。さらに、「障害のある人の存在そのものをシゴトと位置づけることはできないのか」といたことも含めて議論を進めていった。

#### 第4回 たけし文化センターとは？浜松にたけぶんというアートセンターが必要なわけ

時間 2月17日(水)18:00～21:00 その後交流会

場所 たけし文化センター

ゲスト 伊藤裕夫(富山大学芸術文化部教授)

播磨靖夫(財団法人たんぼぼの家、エイブルアートジャパン常務理事)

メンバー 長田治義、片岡祐介、久保田翠、関根幹司、ホシノマサハル、本後健、山口祐子

その他自由参加 10名(横浜市創造都市推進室、静岡県文化政策課、浜松市文化財団、ゆりの木通り商店街店街、クリエイト浜松館長、月見の里学遊館学芸員、建築士、浜松市美術館館長、学生、その他)

レッツ関係者 8名



研究会の様子

現在実験事業を行なっているたけし文化センターは、4月から浜松市入野町の福祉施設とおなじ場所で行なっていく。たけし文化センターというコンセプトがレッツから生まれ、中心市街地での、6ヶ月間の展開のなかで、障害のある人を基軸にしていく、コミュニティーアートセンターの可能性と意義を検証しているが、その中で今後どのように展開していけばいいかを、ゲストや、一般の参加者の方々とともに議論を進めて行った。

#### 第5回 アートセンターとしての福祉施設とは？福祉施設から発信する新しい文化とは？

時間 3月22日(金)13:30～17:00

場所 たけし文化センター

ゲスト 播磨靖夫(財団法人たんぼぼの家、エイブルアートジャパン常務理事)

関根幹司(スタジオCOOCA施設長、元湘南福祉センター工房絵施設長)

林加奈(音楽家、紙芝居師)

メンバー 長田治義、片岡祐介、久保田翠、関根幹司、ホシノマサハル、山口祐子

その他 自由参加 20名(コミュニティーアート研究者、ゆりの木通り商店街、障害者家族、福祉施設関係者、特別支援学校先生、学生、レッツ関係者5名)

最初に福祉の現場2名の、アルスノヴァで行っていく福祉事業と、たけし文化センターに象徴される、障害以外の人々へのアプローチのしかたなどその疑問等を提言してもらい、その後、福祉とアートは同じなのか違うのかといった議論を展開し、たけし文化センターの検証とともに、今後目指す福祉士謁のあり方について討論した。

## ②総括

### 障害のある人のアートを主軸にした仕事の状況

たんぼぼの家は、障害者自立支援法が始まった年に、自主製品を作ることをやめた時期がある。一度立ち止まって、障害のある人の表現の持っている社会への影響力を考えたときに、アートや、表現も一つの、経済的価値を生む。それを福祉の現場から立ち上げていくとして生まれたのがエイブルアートカンパニーである。

表現活動の質を問うてきたエイブルアートの活動から、障害のある人のシゴトや経済活動につながる活動へシフトした。そして、アートは、障害のある人を神格化するためにあるのではないと柴崎さんは言う。

福岡のアトリエブラヴォは、お金を稼ぐことを目標として掲げた。やりたいことを出しあい、そして制作した。作ったも

のはある程度本人の責任もあるが、それを対価に変えていくのは職員のシゴト。デザインや、紙媒体に変えて売り出した。ただ売るのではなく、これをどう見てもらうか。いろいろな人に触れ合うワークショップやライブペインティングなどに障害者がファシリテーターとして参加しお金を稼いでいる。それが工賃になる。

人と交わって仕事ができる。いろいろな人に知ってもら。コミュニケーションがどんどん上がっていくことで、いろいろなところに呼んでもらう。地域に出て行くということになる。そうしてお金もついていく。

工房絵(現在、施設長が独立しスタジオCOOCAを開設)は、18年前に立ち上がり、障害のある人のアート活動をシゴトとして行なった。しかしそこに行き着くまでは、アートをシゴトとしたかっただけではなく、障害のある人の行為を最も変形させないで、やりたいことに沿った支援を考えていく中で、アート活動、表現活動に行き着いた。

毎日制作されるものをお金に変えていくことが必要であると関根氏は訴える。それは、障害のある人の行為は時には家族にとっては問題行動であり、むしろやめさせたい行為である。それを表現と位置づけ、「売れた」という事実を作ることで、「こんなものでも売れるんだ」といったことを、親や周りに認識させることができる。彼らの行為に価値を与えていく。金をもうけることが目的ではなく、人々の障害のある人の行為に対する価値観を変えていくために、売れることにこだわる。

## 社会とのズレの中で苦しむ現代人

北欧は障害の人が普通に街を歩いている。バギーに乗っている人、高齢者が困っていると、誰も何も言わずにずっと手を差し伸べてくれる社会がある。日本では、例えば知的障害の自閉の人が、乗るバスの前でメモを掲げて、バスに乗れなくて困っていても見て見ぬ振り。そこで誰かが「このバスでいいんですよ」と声をかけてくれれば彼はバスに乗れるし、その経験が一生を左右することもある。(成功体験となる)。しかしそうした環境がない。

最近、健常な人でも精神的に病む人が多い。働き盛りの男の人がうつ病となり、自宅療養し、シゴトをしない自分を責めてしまう。それは本人の能力の問題ではなく、社会がそういう風に思うだろうということでマイナスに感じてしまう。社会との照らし合わせで自分の立場を確認する。社会にもう少し優しさがあれば、もう少し多様な生き方を認める風土があれば、対社会との関係で、自分を苦しめる必要がなくなる。

それをどのように解決していくのか。

**障害のある人の存在にいろいろな人が生きやすくなるヒントがある。**

**そこを変えていく力が障害のある人にある。**

それが今回の議論のなかで浮かび上がってきた。

## 人と人とのコミュニケーション

障害の人が街に出ると結構いろいろなトラブルが起こる。店のものを壊したとか、騒いだとか。しかし一方的に攻められることが多いが実はそうではない。そこを分析していくと、必ず、店員が障害のある人を客としてちゃんと扱わなかったり、障害だからと、注意しなかったり、そうしたところからトラブルが起こる。

「もう来ないでくれ。」と怒鳴られる。当の本人も、職員も落ち込む。しかしここからが本当のコミュニケーションが始まる。なんで彼はそうしてしまったのか。店ともジックリ話して、棚の陳列を変えてもらったり、一般と分け隔てない接客をするよう心がけてもらったり。そうするとぴたっと問題行動はおさまる。つまり、客として、人として、きちんと対応してもらいたかった。ちゃんと理由がある。店も、サービスの本位を確認する。

いつの間にか、人と人のコミュニケーションまで、マニュアル化されていて、大勢の意見や行動に基準が出来てしまった。社会全体がマニュアルどおりに動くことをあたりまえと思い出したときに、障害のある人や、そこに当てはまりにくい人は、生きづらくなってしまふ。しかし、人間はそんなに単純ではなく、多様な人がいる。そうした社会に隙間を作っていくと、ますます生きづらくなる人が増えてしまふ。

そこを変えていくのが障害のある人の役割でもある。彼らはコミュニケーションとしての言葉を自由に操れる人は少ない。しかし、彼らの価値観を理解しようとすることで、その隙間が広がっていく。言葉を持たない彼らは、本当に必要なものを伝えていく能力は、健常といわれる私たちよりも優れている。

## 新しい価値観をつくる

親の葬式に参加することなく施設に来ていた障害のある人がいた。なぜ参加しないかと聞けば、騒いだり、変わったことを葬式でしてもらっては困るので施設に行かせたといわれた。しかしそもそも誰が葬式のあのスタイルを決めたのか。静かに、厳かにしなくてはいけない、焼香は何回する・・・など細かく決まっているかのようなルールは、実は、慣習であって、葬式の意味とは違うところにある。親がなくなって、そこで障害の息子が騒いだとしても、親を皆で送ることに相違ない。実は私たちは意味の解らない慣習や、習慣、価値観に縛られているだけではないか。

ある有名な地元のオーケストラが支援学校に公演に来た。難しいクラシックの曲をやってもそのうちあきてしまっ てみなが動き出す。いつもは歓迎されるのに、終わっても拍手もない。それが悔しくて、次回来た時は、クラシックの他に誰でも知っている、今はやりの曲を演奏した。すると、会場は大騒ぎになり、踊りだす子ども、拍手、足を踏み鳴らす、声を出して歌いだす・・・大盛り上がりになった。終わった後も拍手喝采。舞台上上がって握手を求められた。この経験は団員にとって大きなきっかけとなった。「私たちは本当に観客の喜ぶ演奏を今までしてきただろうか。お客さんは、我慢して聞いていたのではないか。コンサートはこんなもんだと思い込んではいなかっただろうか」そして、コンサートは静かに聴かなければいけない、お行儀よくしなくてははいけないばかりではないことも、そのほうが何倍も感動があることを知らされた。

障害のある人は既存のルールを理解できない人が多い。しかし、そのルール自体を見直すきっかけを私達に与えてくれる。彼らは新しい価値観を作り出してくれるひとたちでもある。

## 障害のある人のシゴト観

5回の研究会から、障害のある人の社会的役割として、

|  |
|--|
| <p>社会の価値観を新しくつくる、ずらしていく<br/>私たちのコミュニケーション力を上げていく、鍛える</p> |
|--|

という2点が挙げられることが見えてきた。

## 3・ヒアリング

### ①広島市現代美術館

「一人快芸術」

会期：2009年12月19日～2010年2月21日

松岡剛（広島市現代美術館学芸員）

取材日：2010年2月18日



### ●所見 鈴木一郎太(NPO 法人クリエイティブサポートレッツ)

初音ミクの二次使用の広がりや、障害者芸術の露出など、素人とプロの境界線がぼんやりとしだしている、そうした社会の中でのタイミングで、「一人快芸術」はその境界線に目を向けた展覧会となっているように感じた。また、障害のある人の作品を他の作家と混ぜて展示せず、一部屋にまとめたことで、障害と健常の境界へ向けた人道的な視線は企画趣旨には含まれていないことが明確であり、障害のある人だけでなく、アーティストも他の出品している人も全員が、「創る喜び」といった点で集約される「創る人」として、当たり前と同列に扱われていた。

美術館というアート歴史や社会的位置づけをバックボーンとした場所で、無為の人と意図的なアーティスト、またそのどちらでもない人を混ぜあわせたこの展覧会では、「創る」という素朴な行為に純粋なまなざしを向けていた。時代にあわせ様々な作品に価値付けを行ってきたアートが、その原点である、独自になにかを「創る」を続ける行為そのものに価値を引き戻す、ある意味ではたいへん勇気のある展覧会だと感じた。歴史を積み重ね社会性とともに権威を獲得してきたアートが、その権威につきまとうわずらわしさを表出しているかのようでもあった。

「アウトサイダーアート」の動きが世界的に広まり、専門のギャラリーがあり、美術館でも展覧会が催され、日本でも作品は市民権を獲得しだしている。そして「作品を創った障害のある人」はその作品の与えられた権威を通して、

社会での位置付けを獲得している。しかしその一方で、展示に適さない「行為」に面白さを持った障害のある人達は、その権威付けの構造に乗れない可能性がある。「アウトサイダーアート」も、「創る」から価値がある人であるという視点の植え付けを行っているわけではなく、「障害」に対する社会一般のイメージの払拭、またはまだ広くは知られていない面白い作品の紹介として、創られたものを作品としているのだろう。しかし、この「一人快芸術」で試みられているように「誰が創っているのか」を見せ、人そのものやその日常、コミュニケーション、あり方の価値発見、発信につなげていくという価値観の幅を広げる視点が重要となるように思う。

また社会で催される全てのことに適応することは難しいが、当たり前には障害のある人が遊びに来たり、当たり前には扱われるくらいに許容力を広げた「一般向け」の場所やイベントの創出、開催が今後必要であろう。そこで重要となるのは「こころもち」だろうと私は考える。この「一人快芸術」は、市立公共施設での企画内で、当然のごとく出品者と同列に障害のある人を扱う「こころもち」がその根底にあった。また、その「こころもち」は企画内だけでなく、来館者を受け入れる「こころもち」へともつながっていったように思う。

この展覧会は、障害のある人に限らないが、広い「人」に対するまなざしを根底に強くたずさえた上で企画されたものであり、受け取り手によって捉え方に大きく違いはあるだろうが、「日々の当たり前」に価値を見出す視線を育み、社会に多様性の受け皿としての土壌を築く糧となるものだと思う。

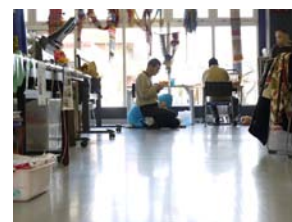
## ②アートセンターきらり

### ●所見 鈴木一郎太(NPO 法人クリエイティブサポートレッツ)

外へ向けての作品などの発信が目立つが、根底にあるのは利用者個々へむける丁寧な視線であり、福祉の現場にアートを取り入れ福祉支援を行っているという印象を受けた。

障害のある人たち、特に知的に障害のある人たちは周囲の雰囲気に対して敏感な場合も多いので、がちがちに問題解決への効果のみを目的とせず、リラックスした生活の場の整備が大切だと感じた。それはスタッフが利用者とともに楽しむことでつくりあげられるのではないだろうか。表現活動の純粋な楽しみ、新しい発見、なにかが生まれそうな期待感などを、スタッフも楽しむ中から、2 次的な効果として解決につながる状況がつけられるのではないだろうか。

そうした状況を生むためのひとつのツールとして福祉的なていねいな個々へのまなざしとアートの発想、創造、表現をあわせてゆくことで、多様な支援につながるように思う。また、そうして出来上がってきたものを広く社会へ発信してゆくことでの社会性の獲得、社会との接点の創出、人とのコミュニケーションの機会などは、利用者だけでなく、社会により多様な生活を生み出すだろう。



アートセンターきらりの様子

アートの取り入れ方の伝達(施設内外双方ともに)は専門性が高く難しい。また「個性を活かす」という言葉は使い古され曖昧さが際立たされているために、聞き手次第でどうとでも捉えられてしまう。敢えて言葉にしてしまうなら、「コミュニティアートの福祉施設での実践」ということになるが、個々へ向けるまなざしはもともと福祉的であると考え、アート寄りの解釈にのみ特化してしまうことは好ましくない。結局のところ、「アートセンターきらり」のように実践を行い事例として発信しながら、言葉による手法の伝達、感覚の研磨をしていくしかないようにも思われる。しかし、言葉への落とし込みと伝達は必ず必要となってくるので、うまく専門家の知識をとり入れながら、それぞれの現場からつくられるべきだと思う。

柔軟性が養われている人であれば榎野氏が実践しているような「まなざし」の獲得は可能であると考え、アートセンターきらり」またその法人内でもそうした人材は育成されておらず、活動に対する法人内からの批判も(当初は)あったのが現状である。スタッフへの伝達、教育は大きな課題である。しかし、ある個人のやり方をまねることは、先に触れた、スタッフが楽しむことにはならない。それぞれのスタッフが一個人として、個々の興味や特性をいかした「まなざし」を獲得し支援に結び付けると、「個人として無理のない支援」へつなげて考えたい。

今後、福祉の現場でのアートの有用性を広め、それを活かした支援方法を、施設、大学、専門学校などでの講義、実践により興味を持つ人材の発見、育成が必要であろう。また、議論、意見交換スキルもそこには大きな役割を持つ。

## 4・第9回全国障害者芸術文化祭しずおか大会 全国公募企画展示「ぞくぞくゾクゾク」

### ①開催の経緯

2009年11月13日から15日まで、第9回全国障害者文化・芸術祭しずおか大会が静岡市のグランシップで開催された。おなじ年に静岡県は第24回国民文化祭しずおか2009も開催されている。障害者芸術文化祭は毎年県内、東部、中部、西部を巡回する形で開催されている。毎年1000点近い応募があり、この大会を楽しみに日々研鑽を積んでいる障害のある方も多くいる。今回、静岡県健康福祉部障害者支援局から、大会の展示の企画、提案を協働で行なうお話をいただいた。静岡県の障害のある人のアート活動は、前述したとおり、特に身体障害のある方を中心に、余暇活動として、絵画、造形に親しんでいらっしゃる方は多い。しかし、趣味や余暇ではない、生きることに直結している、まさにアートとしても十分にその力がある。県の職員、レッツのスタッフと話し合った。今回の大会では、そうしたこともきちんと、伝えていく展覧会を目指すことにした。

#### アートディレクター

鈴木一郎太(アーティスト)

深澤孝史(アーティスト)

### ②コンセプト

毎日の生活の中で、障害のある方々の熱意から生み出されている、その人のあり方に密接にかかわる表現そのものを「作品」として発信し、それらに「見て、触れて、感じる」ことを通して、背景にいる「人」のおもしろさ・楽しさ・想いと、つながっていきたいと思います。



大ホール展示風景

### ③今大会のねらい

障害のある方々が思いをこめて作った作品や、独特の作品、努力の終結した作品、それらの背景にはかならず人がいます。そして作品には、その人のありかたが色濃く反映されています。作品は人ありきです。人がいいと作品もよくなります。しかし、作品を従来の成果品としての位置付けで考えていると、人の魅力が見えにくくなることがあります。そういった魅力は、作品と呼ばれる前に、何気ない日常の中ですでに生み出されています。

今大会は、そのような、人自身の魅力につなげるための芸術文化祭として、当人達はもちろん、日常的に障害のある方々に接する人たち、また広くは普段あまり接点を持つ機会のない方がにも、人のありかたの魅力への気付きとなるイベントにしたいと考えます。



### ④展示企画内容

#### 「ぞくぞく展」

落書き手遊びのようなものから、何日もかかってきた大作など、さまざまな形で現れる熱意、興味、気まぐれなど、日常と密接にかかわる表現として打ち出すため、会場にたくさんの家具を並べ、家具を壁代わりに公募作品を展示する。

#### コンセプト

熱意と努力を通して完成されたものから伝わる「その人のありかた」は、見る側の心持ち次第で、普段見過ごしがちなちょっとしたものにも同様に含まれることがあり、その人の大事にするものはその人そのものを表し、あたりまえのように生み出されていること、来場者の日常と地続きであるということを感じてもらう。

#### 「へやのあるじ」

カメラマンが取材して撮影したこだわりの個人スペースや部屋の写真展示。





## コンセプト

社会の一員として公共性の高い場所では押さえられている「その人のあり方」が、とても現れやすい個人スペースを通じて、日と丸ごとの表現を伝え、表現の幅の広さを知る。

### 「notebooks」

メモ帳、日記、学習帳、らくがき帳。使い方によってさまざまに名前が変わるノートを、来場者が手にとって読める作品集として展示。

## コンセプト

その都度、その瞬間や、「その人のあり方」が残されるノートから、記録、記憶、発散、個人的興味の大事さ、継続することや、かきとめる楽しさを知る。

## 5・福祉サービス事業「アルスノヴァ」

### ①アルスノヴァの背景

今回の「たけし文化センター」で得たコンセプトを福祉施設として実現する場を、4月から始める。福祉サービス施設アルスノヴァの1階にて実現させていきたいと思う。ここは浜松市中心市街地から6キロほど離れた、旧街道沿いの3階建ての建物である。昭和40年に建てられて鉄筋コンクリート造の建物は、当初浜松の産業を支えていた繊維工場が入野周辺には集中しており、その組合会館として建設された。隣に検品所もあり、近隣の経営者や職人たちが、会議をしたり、くつろいだりした場所であった。（床屋、飲食店もあった）



アルスノヴァ外観  
（浜松市西区入野町）

その後、繊維業界の衰退とともに、57年に現在のオーナーが買い取り、事務所兼住宅として改装した。現在はその名残はあまり感じるができないが、地域の古くから住んでいる人たちにはよく知られているビルである。

2007年、政令指定都市発足後、12市町村が合併し、7区に分かれたが、西区は旧浜松市西側と、雄踏町が組み込まれた。西区には障害者福祉施設が少なく、特に障害のある子どもの施設（学童保育を含めて）は1つもない状況であった。今回のアルスノヴァ開設はこうした地域間格差を解消する上でも大きく貢献している。

旧街道雄踏街道は、現在もバスの運行量が多く、大型ショッピングセンターの進出、バイパスの建設によって、開発が進んだ。慢性的な渋滞の解消にはつながったものの、以前交通量は多い。

### ②アルスノヴァの利用者のタイプ

現在、利用者は2つに分かれている。

1つは、重度の知的に障害のある人。レッツの表現活動を特徴とする活動と、その性格から、障害が重く、作業や一つのタイプの仕事になかなかなじめない方が多く関わっている。必ずしも表現活動が得意ということではなく、むしろ「何をしたいかわからない」「何が向いているのか、好きなかわからない」と思われる方が多く関わるとも思われる。レッツがくぼたたけしから「たけし文化センター」を導き出したように、個々の個性を見つめながら導き出す作業を行っていく。

もう1つのタイプは、精神障害、あるいは、中度、軽度の知的障害のある人が関わっている。こうしたタイプの人は、既存の福祉施設になじみにくく、社会との接点を求めている。引きこもりの状態から脱却したものの、すぐに一般就労には躊躇している人、数々の就労の失敗を経験し、精神性の障害を引き起こし、あるいは潜在化を露出し、まず心の安定と、安心して寄り添う居場所を求めている人など。

現在、知的に障害のある人は浜松の場合、施設の数も多く、どこかに就労することが、まだ可能な状況ではあるが（平成21年度と区別支援学校卒業生）、精神系の障害をとまなう人々の居場所はまだまだ少なく、特に10代、20代の若い人が好む施設の形態が不足している。

精神系の障害者は、潜在化していることもあり、現在は、医療機関等からの紹介が多い。

レッツは、たけし文化センター実験事業、アート活動を通して、他の福祉施設とは違うイメージがあり、こうしたこと

を好む人が関わる傾向がある。

### 自立訓練プログラム

こうした 2 つの違うタイプの人々にサービスを開始するにあたって、障害の重い人々に対しては、ほぼ個別に対応していく。また指導員だけではなく、造形、パフォーマンス、音楽など、それぞれのアーティストに関わってもらいながら、その方の特徴と可能性を追求していく作業を丁寧に行っていく方針である。

精神系及び、中、程度の障害のある人に関しては、グループディスカッションを行い、自分が何をしているときが楽しいのか、気持ちがいいのか、何がしたいのかといったところを、個別、グループで話し合い、ワークショップ等を通して、職員とともに考えていきたい。

### 休日(土日)プログラム

他の福祉施設に通っていたり、就労していたりする人であっても、何らかの障害やハンディがあり、なかなか、居場所を見つけることができない人は多い。レッツが 10 年間行なってきたプログラムや、今回実験を行なったたけし文化センターは、そうした人々の止まり木のような意味合いがあった。

こうした要素を復活させるためにも、土日の利用を可能としていく。

カフェを併設して、障害のある人の就労の場所であり、さまざまな人々の居場所ともなりえる場を作っていく。

### ③アルスノヴァのたけし文化センター

たけし文化センターの障害のある人を基軸とした、地域コミュニティーの拠点を目指す場を引き続き行なっていくと思う。ここで、「たけし基準」の、敷居の低い公共空間を目指していく。

6ヶ月の実験の中で、たけし文化センターは、会議をしている横で子どもが遊び、騒ぎ・といった状況が同時多発的に展開されていた。しかしそれは無法地帯化することがなく、ある程度の「住み分け」が行なわれ、お互いがお互いのやりたいことを尊重していた。つまり、ルールの敷居を低くすることで、かえって多様な活動を呼び込み、そこを利用する人たちが、それぞれで工夫し、それぞれの自由さを失わない程度のルールを自分たちで作出す場となった。さらに、横でやっている活動や行為、事象にいい意味で影響を受け、お互いを認め合うことによって、こうやってみたい、こうなれば面白いといった「創造力」に溢れる前向きに発展する場が実現していた。

こうした場は、障害のある「たけし」を基軸に据えたことによって生まれる「自由度」と、それを支えるアートディレクターが必要である。アートディレクターの役割は大きく、福祉の職員とはまた違った発想で、社会とどうアクセスするかを編み出して行く。それは一方で、より高度なアート活動でもある。

こうした場にしていくこと、こうした場を障害者施設が運営していくということは、新しい福祉施設の実験でもある。同時に、たけし文化センターは障害のある人の「仕事場」としての可能性も多く含んでいる。つまりこうした場を、提供できるのは障害のある人であるからこそであり、ここを就労の場所ととらえることができる。同時に、アーティストが対社会とのかかわりの中でアートワークを展開する場所でもある。

このように、アルスノヴァにおけるたけし文化センターは多くの可能性がある。

### レッツの理念

NPO 法人クリエイティブサポートレッツは、障害や国籍、性差、年齢などあらゆる『ちがひ』を乗り越えて、人間が本来持っている、「生きる力」、「自分を表現する力」を、見つけていく場を提供し、様々な表現活動を実現するための事業を行い、全ての人々が、互いに理解し、分かち合い、共生することのできる社会づくりを行います。

特に、知的に障害のある人が、「自分を表現する力」を身につけ、文化的で豊かな人生を送ることの出来る、社会的自立と、その一員として参加できる社会の実現を目指す。そして、知的に障害のある人も、いきいきと生きていけるまちづくりを行っていきます。

## 今までの経緯～大人から子どもまで

NPO 法人クリエイティブサポートレッツは 2000 年より、主に障害のある子どもの表現活動をサポートする活動を行ってきました。レッツでは、障害のある子どもから大人まで、表現活動を通して、自己を認め、社会的にも、障害のある人の地位向上に努めています。

- 表現活動に親しみ、内なる力を育てるプログラム(各種講座)
- さまざまな人たちの居場所づくり
- 障害のある人の見え方を変えていく(家族の中で、社会の中で)
- 障害のある人の存在を、多くの人たちに知っていただく事業(展覧会、イベント、アートフォーラム、その他)

## アルスノヴァの理念

障害のある人には、ゆるぎない価値観・文化・個性を持った人が多くいます。

特に障害が重いとされる人たちにその特徴は顕著です。

本人が社会に、無理にあわせるのではなく、本人の生活や、人格から、なにがあっているのか、何がしたいのか、どんな生き方や仕事のしかたがあるのか・・・を、そうしたことを丁寧に見つめ、創造力を働かせて、開発していくところです。

障害のある子どもたちやひとたちが自由に、健やかに毎日を過ごすことはもちろんのこと、彼らのゆるぎない個性と、独自のコミュニケーション力を大切にしながら、さまざまな人たちの価値観を変えていく試みを行って行きます。

そして、支援する人もされる人も、障害のある人も、周りの人も、「私の幸せ」を追求していくところです。

## 児童デイサービス目的

障害のある子どもが、自己を肯定し、健やかに生きていくために、その方の、身体及び精神の状況、ならびにおかれている環境に即したプログラムを提供し、行って行きます。特に、その方の特徴に合わせた表現活動、遊びを通して、日常生活における基本的動作の習得と社会性を育てていきたいと思えます。

- ①利用者個々の障害の状態に応じた指導に努め、様々な生活場面を通して、生活習慣、社会性を習得できるように努めます。
- ②表現活動、あそびを重視し、その方の精神的な安定と自己肯定感をうながして行きます。
- ③地域活動、社会活動への参加を積極的に行い、社会性の向上と多くの理解者を増やして行きます
- ④障害のある子どものいる家庭へのサポートも積極的に行い、子どもを取り巻く環境の向上に努めていきます。



アルスノヴァ・児童デイサービス

## 自立訓練の目的

障害のある人が、自己肯定感を持ち、自分の内なる能力を開発していくプログラムを提供することで、身体的、精神的な安定と、向上を目指して行きます。障害を個性ととらえ、コミュニケーション能力を高め、さまざまな人たちとの交流の機会を作り、多くの人に認められ生きていくよう支援を行って行きます

- ①利用者個々の障害の状態に応じた指導に努め、様々な生活場面を通して、生活習慣、社会性を習得できるように努めます。
- ②表現活動、その特徴に則して、その方の精神的な安定と自己肯定感をうながして行きます。
- ③障害のある人の社会との接点を作り、多くの理解者を増やして行きます
- ④障害を個性ととらえ、障害のある人独自のコミュニケーション能力を伸ばして行きます



### Ⅲ・提言

#### 1・障害のある人のシゴトのあり方

研究会、事業を通して、障害のある人の役割として、

固定されてしまった既成概念や価値観を変えていく存在であること。  
人と人とのコミュニケーションの多様性を提示する能力があること。

があることが解った。

さまざまな問題を抱える現代社会において、彼らの「価値観を変えてく」「人間が本来持っているコミュニケーション能力を引き出す」力は、今非常に求められている。にもかかわらずそうした能力を生かせる場があまりにも少ない。

この力を仕事に変えていくチャンスを作ることは、障害のある人の新しい仕事のあり方を掲示することにもつながっていく。

そもそも表現活動は、障害のある人の特徴を非常に良い形で社会に提示していく一つの方法であるといえる。しかし、そこで対価を稼ぐといった問題に突き当たった時に、非常に幅が狭まってしまう。それは日本の社会の中で、そうした表現活動に対して対価を払う習慣は脆弱であり、市場は非常に小さい。障害のある人の表現活動はどうしても余暇活動としてのとらえ方がされていて、仕事として社会的な活動と認められるにはまだまだ時間を要する。

彼らの存在そのものをだたく評価し、社会的にも必要と認められる営み(仕事)として認知される方法とはなんだろう。その時にヒントになることが、「既成概念や価値観を変えてく」「人と人とのコミュニケーションの多様性を提示する能力」である。つまり、さまざまな人と障害のある人が接点を持つことで、社会を変えていく能力がある。

#### 2・障害のある人の地域との関わり方～地域コミュニティの中核としてのあり方～

たけし文化センター実験事業

- ・ 浜松市の中心市街の比較的、いろいろな人たちが来やすいところで、障害のある子どもの視線を基軸とした公共施設を作った。
- ・ 多くの人々が来場し、6ヶ月間ではあるが、むしろ社会的にはなかなか居場所の見つからない人たちが集っていた。
- ・ 6ヶ月間の中でそうした人たちが安定していたり、つながったり、新しい就職場所を探していたり、福祉的な効果も実は大きかった。
- ・ 市民のさまざまな文化活動、それもありアート系の企画、公民館や貸し館では物足りない人々にとって、非常に適した場となった。
- ・ まさに、浜松にふさわしいアート空間、アートセンターの姿を実験することができた

#### 実験事業を通して得られたコンセプト

- 比較的通いやすい立地
- 障害のある人(タケシ)を基軸としたところから生まれる開放感、敷居の低さ、ユニークさ
- あまりみたこと、体験したことがない空間
- アートディレクターの存在・・・選別は行なっている
- 一般の公共施設、公民館、ギャラリーでは取り扱わない催し
- 若手地元アーティストの支援(止まり木、よりどころ、制作の現場、発表の場となる)
- なかなか社会的に居場所の作れない立場の人たちにとっても安心できる場所(場の雰囲気ゆるい)

### たけし文化センターの社会的評価

今回の実験事業は、浜松市文化政策課の応援の他に、フィリップモリス株式会社、文化・芸術における福武地域振興財団、今後、アサヒアートフェスティバルの応援を受けて行なっている。これらは、日本全国のアートNPOを支える助成団体である。特にここでの審査委員に、播磨靖夫氏、加藤種雄氏、北川フラム氏は、3名とも文化庁芸術推奨、文部科学大臣賞の芸術振興を受賞した方々で、レッツともとても親交が厚い方々である。その他に東京大学文学部の小林康夫教授にも支持を受けている。このようにレッツ及びたけし文化センターの評価は全国的に見てもアートによる地域振興において、高い注目を集めている。

今回実験を行なった、たけし文化センターは、障害のある人を基軸にしながらのコミュニティーアートセンターの可能であることを実証した。さらに障害者福祉施設をベースにしながら、たけし文化センターを併設させる実験を行なっていく。同時に、障害のある人がこの、たけし文化センターを運営する側になることで、障害のある人の就労の可能性をさらに模索していきたい。

また、地域のコミュニティの中核となる、福祉施設のあり方も同時に実験していく。

## たけし文化センター構想[中心市街地編]

今回の「たけし文化センター」で得たコンセプトを実現する場ができたかどうか。

たけし文化センターは、NPO法人クリエイティブサポートレッツが長年培ってきた経験と考え方の集大成であった。それは浜松の新しいアートシーンを作り出していく一つの試みであると同時に、**社会的に疎外されている人々、障害のある人たちへの支援**でもあった。なかなか社会とつながりにくい彼らを中心に据え、若手アーティストの支援によって、多くのひとたちが来やすくなったり、何か作りたくなる、したくなる、など、創造的な雰囲気を作り出すことができた。

さらに発展して考えていくと、

**障害のある人の新しいシゴトの形でもある。**

**そして、若いアーティストの創造の場でもある。**

このアートセンターは、アーティストと社会的弱者両者の支援を実現した。

これをさらに発展させてアートセンター構想を組み立てることは、全国的にも、そして世界的にもあまり例のないアートセンターとなる可能性を秘めている。

- 若手アーティストの支援の場
- 障害のある人の就労先
- 社会的にも弱い立場にある人の居場所
- 市民の文化力を発掘、振興する

運営の方法案

中心市街地にあるアートセンター(鴨江別館)  
浜松市から運営、建物管理、事業を委託



### NPO法人クリエイティブサポートレッツ

1

マネージメント

- ・ アーティスト雇用
- ・ ディレクター
- ・ スタッフ

浜松市の事業費

+

2

障害者自立支援法に基づく福祉サービス

(自立訓練or特定子会社or就労継続A、B)

- ・ 主に精神障害者、中度、軽度の知的障害者の就労先

自立支援法事業・事業費/国、県

1と2のスタッフが共同で事業を進める

企画/運営/展覧会/広報/レジデンス/イベント/アウトリーチ/カフェ/建物管理  
鴨江別館

1928年に建てられた鉄筋コンクリート造の旧警察署。現在は鴨江別館として主に音楽系の貸し館となっている耐震の不備により解体される予定であったが2007年、NPO法人クリエイティブサポートレッツの呼びかけで、市民を中心として保存活動が展開、2008年年に保存が決定しアートセンターとして活用することが認められた。その後その使い方については浜松市文化政策課を中心として模索中。今回のたけし文化センターの実験事業においても、アートセンターの可能性調査を行なった。

## たけし文化センター構想[福祉施設編]

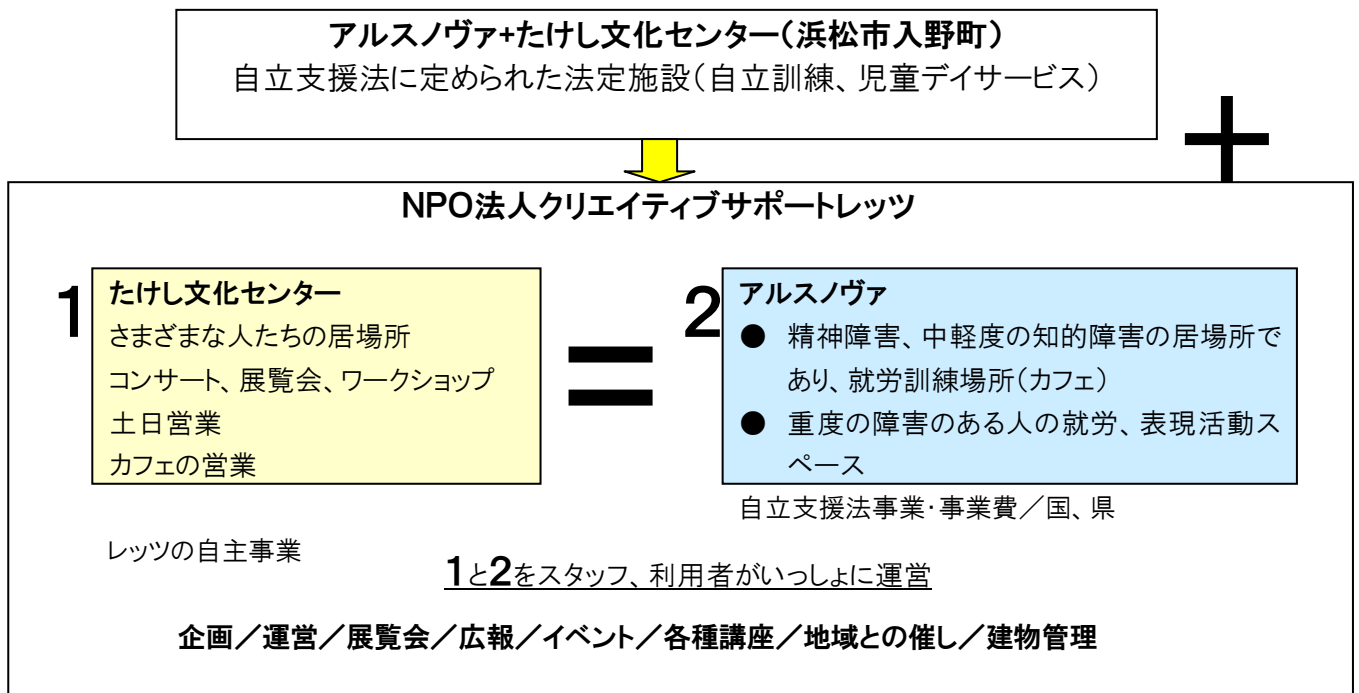
今回実験を行なった、たけし文化センターは、障害のある人を基軸にしながらのコミュニティーアートセンターが可能であることを実証した。さらに障害者福祉施設をベースにしながら、たけし文化センターを併設させる実験を行なっていく。同時に、障害のある人がこの、たけし文化センターを運営する側(企画運営に参画)になることで、障害のある人の就労の可能性をさらに模索することができる。

また、地域のコミュニティの中核となる、福祉施設のあり方も同時に実験していく。  
ここにアルスノヴァと、たけし文化センターを併設させる意味は、

### 障害者施設として、障害のある人の新しいシゴトの形を模索する 地域のコミュニティを支えるアートセンターとして活動をする その運営に、障害のある人が関わる

以上のことを実現していきたい。同時に、以下の点も実現していきたい。

- 若手アーティストの支援の場
- 障害のある人の就労先
- 社会的にも弱い立場にある人の居場所
- 市民の文化力を発掘、振興する



#### 自立訓練(障害の重い人のプログラム)

障害の重い人は表現活動に大きな可能性を見出せる場合が多い。自立訓練メニューとして、音楽、絵画、造形、パフォーマンスなどの表現活動を取り入れて、個性に則した活動を探し、就労へとつなげていく

#### 自立訓練プログラム(中、軽度の知的障害、精神障害)

カフェの運営、たけし文化センターの運営を通して、その人にしかできない仕事を開発していく。グループディスカッション、ワークショップなどを通して、自己を見つめ、やりたいことを整理し、就労のスタイルを作っていく。



## 土日の営業

他の施設に通っている障害のある人、就労している障害のある人が、表現活動に親しんだり、友だちを作ったりできるようなサークル活動的な事業を土日に運営する。この運営に、当事者（軽度、中度の知的障害、精神系の障害）が参画することで、お互いの立場を共有しながら、仕事の意識を育て、次のステップにつなげていきたい。

## アルスノヴァのたけし文化センター

たけし文化センターの障害のある人を基軸とした、地域コミュニティの拠点を目指す場を引き続き行なっていこうと思う。ここで、「たけし基準」の、敷居の低い公共空間を目指していく。

ルールの敷居を低くすることで、かえって多様な活動と呼び込み、そこを利用する人たちが、それぞれで工夫し、それぞれの自由さを失わない程度のルールを自分たちで作出す。

さらに、横でやっている活動や行為、事象にいい意味で影響を受け、お互いを認め合うことによって、こうやってみたい、こうなれば面白いといった「創造力」に溢れる前向きに発展する場が実現する。

こうした場は、それを支えるアートディレクターが必要である。アートディレクターは、福祉の職員とはまた違った発想で、社会とどうアクセスするかを編み出して行く。それは一方で、より高度なアート活動でもある。

同時に、たけし文化センターは障害のある人の「仕事場」でもある。つまりこうした場を、提供できるのは障害のある人であるからこそであり、ここを就労の場所ととらえることもできる。

同時に、アーティストが対社会とのかかわりの中でアートワークを展開する場所でもある。

そうした意味でも、福祉施設でもあるたけし文化センターは、地域のコミュニティを支えるアートセンターでもある。